

社団法人国際農業者交流会 常務理事 伊藤友春

経営者は帝王学として 子供を海外に送るべき

(社)国際農友会と(社)農業研修生派米協会。2つのプログラムが1988年に一緒になって、現在の(社)国際農業者交流協会に至る。これまで海外に派遣した研修生は約1万4000名。本誌読者にも、若き日にこの研修で農場や自分の未来のあるべき姿に開眼した経営者は多い。優れた人材を輩出してきた研修事業が今、新しい枠組みを考へる必要に迫られている。

海外で学ぶのは技術より 経営者マインド

昆吉則(本誌編集長) 戦後、日本は貧しく欧米は豊かという図式があり、農家は「現状より1000倍大きくならう」と夢見た時代がありました。それが今、世界を見渡して日本ほど豊かな国はなく、後を継いだ今の世代は現状より5倍ぐらいの小さい夢を見て満足しています。そういう時代に、言葉の通じない海外に研修することはすごい価値があるこ

とだと思っんですよ。

伊藤友春(社)国際農業者交流協会 常務理事) ありがとうございます。

昆 まず協会の概要からうかがいたいのですが、どういう経緯で設立されたのでしょうか。

伊藤 1952年、農林水産省の監督する国際農友会が、妻帯者という条件つきで46都道府県から1名ずつを選抜して、米国に研修生を送ったのが始まりです。その後、現地の評判もいいので、規模を広げていくことになったんですね。

一方で後継者以外の次男・三男をど

うやって育てるかという問題もあり、米国でも人手が足りなかったことから、52年、外務省が中心になってカリフォルニアに短期移住する事業が開始されました。これは現地の農場で3年間働いた後、帰国して稼いだお金で別の事業を始めるのもいいし、そのまま海外に住んでもよかったですのですが、法律的問題もあって、66年には農業研修生派米協会へと発展します。このふたつのプログラムが88年に一緒になり、現在の国際農業者交流協会に至りました。これまでの参加人数は約1万4000名です。

昆 現在、派遣している国はどれくらいですか。

伊藤 米国、デンマーク、ドイツ、スイス、オランダの5カ国です。基本は生産現場への派遣ですが、研修

を受け入れてくれるのであればその他の業種にも送っています。海外で先生を担当する人は、農業を職業にして生活している人ですね。今までの農業教育は技術に特化していて、経営の専門家があまりいなかった。だから彼らの背中を見せてもらいながら勉強できることが特長です。

海外に物怖じしない 感覚が備わる

昆 技術ではなく経営者マインドを学ぶわけですね。研修に参加する資格を教えてください。

伊藤 ヨーロッパは日本の農業大学校、大学の農学部、短大を卒業している必要がありますが、米国は特にありません。年齢は19歳から参加することが可能です。

昆 伊藤さんご自身も海外研修を経験されたんですね。

伊藤 私は農家の子弟ではないのですが、「乳と蜜の流れる国」と呼ばれていたデンマークに憧れて、1978年から1年間行ききました。行ってみると日本と比べて生活は質素でしたが、受け入れ農家の経営は安定しており、農業としての豊かさを感じました。自分が思っていた哲学のある農業を見た気がします。

昆 昔、参加した人の話を聞くと、奴隷のように扱われたらしいですね。イチゴ農家では横一列で収穫。一番最後が畝の端までたどりと、また折り返して作業が始まる。だから作業が遅い人は休めない。

伊藤 そのような扱いは、最近ではさすがに聞きませんが（笑）。

昆 そういう地獄の労働をしながら、「資本主義的マーケットを意識した農業ってこうなんだな」と感じる。それがきっかけで、例えば秋田県大潟村の矢久保英吾さんなどはイチゴ作りが人生の目標になったと聞きました。だから、やることはそれぞれ違っても、研修が大きなきっかけになっているんじゃないですか。

伊藤 まさにそうです。私には山形生まれの同期がいて、これから花産業が伸びる時代でもあったので、彼はオランダに花の勉強に行ったんで

す。そこで山形で花を作ってもオランダには逆立ちしたってかなわないことを感じ、何をすべきか考えた結果、地元の百姓になったんですね。今では在来種の大根や米の文化を広めたり、仲間とフォークグループを作ったりして人生を謳歌しています。つまりオランダで勉強して、オランダ流の生産や販売を身につける者もいれば、その逆にある自分の生きる道を見つけることもある。

昆 自分に気づくということですね。少なくとも日本は消費に関してすごい先進国なのにかかわらず、政策的に研修は途上国が先進国に学びに行く発想がまだある。実際に行っている帰ってきた人たちは、農家として生きることを相対化する。つまり個人を自覚して、役人の考えを超えたところに行き始めている。海外研修はつまり、現代の農家として生まれかわる産婆さんの役目があるんじゃないかね。

伊藤 そうかもしれません。日本という国はいいものを持っているはずなのに、絶えず何か貧しい感じがして、メンタル的に苦しい気がします。それが研修を経ると、精神的にも肉体的にもきついことを経験した結果、自信がついて前向きになって帰ってくるんですよ。それはこの仕事を手伝ううえでの醍醐味です。



伊藤友春

■プロフィール（いとう・ともはる）

1975年北里大学畜産学部畜産学科卒業。学校法人自由学園における那須農場勤務を経て、78年(社)国際農友会の農業実習生としてデンマークに派遣。帰国後、全国酪農業協同組合連合会勤務を経て、80年(社)国際農友会へ。同会が合併により(社)国際農業者交流協会に名称変更した後、受入業務課長、欧州支部長、総務部長、事務局長を歴任。08年常務理事就任に伴い退職、現職に至る。

昆 これから日本のマーケットが縮小する中で、海外にマーケットを求めるとき代になっていきます。そうなのと言葉だけではなく、世界の中で自分の農場を考える感覚も必要になっていく。研修に行けばそういうセッスも身につくのでは？

伊藤 ええ。研修の場合、言葉は語学として高い点数を取れなくても、相手とのコミュニケーションが交わればいい。だから研修から帰ってきた人材を企業に斡旋する時、英語ペラペラじゃなくても「コミュニケーション能力がありますよ」と紹介できるんです。そういう人材は農産物を持たせて放りだせば、どこの国でも売ってくる。海外に物怖じしない感覚が備われば、「輸入自由化しにくい黒船がやってくる」と世間が騒いでる時も、「いい作物を作れば競合しなくて大丈夫」と構えていられると思うんですよ。

海外研修は日本人のためのプログラムではない

昆 最近、参加者の傾向に変化はありますか。

伊藤 自分でアルバイトしてお金を貯めてくる子が目立ちます。景気が悪いので、親に負担させられない。あと非農家出身者や女性の割合も増

えています。

昆 それはいいことですよ。海外における研修生の評価はどうでしょう。オーストラリアでワーキングホリデーを受け入れてる農場では、日本人に対して親近感を持つてるのに男の子は要らないって言うんですよ。理由を聞くと、言葉の問題じゃなくて、態度が気持ち悪いからだそうです。

伊藤 そこがポイントで、決して日本人のためのプログラムではないんですよ。研修生を育てて帰そうという慈善事業家たちの力で成り立ってるわけではなく、向こうは企業の中でトレーニングをしながら、研修生をギブアンドテイクの労働力として期待している。だから親に全部セッティングしてもらって、行った先で「僕は何したらいいんでしょう？」とボーツとしていたら「要らないよ」と言われるのは当たり前。行く価値のある研修ではあります。本人にやる気があることは大前提です。

昆 日本の農場でも、親が「うちの子供使ってください」と頼んでくるのはほとんど使えないものにならない。

伊藤 ハングリー精神の時代であれば、お国や自分の生活のため、何でも歯を食いしばってやるし、言葉が分からなくても自分の全アテナを張って取り組んでいた。それが親に



何でもやってもらうと、農場主が何を考えてるか感じようとしなくなる。そういう意味で、今は全体的に内向きかもしれません。農業に限った話ではなく、海外留学生や旅行者も少なくなっています。

昆 ということは、研修生の数も減っているのですか？

伊藤 かつて1年で2000人ぐらい派遣していたのが今は70人ぐらいです。かつてのように農業大学校に2年間行って、後は海外研修するという人がほとんどいなくなりました。わざわざ海外に行く苦勞してまで継ごうという後継者の意識が、以前より格段に落ちてきている気がします。

経営者こそ、帝王学として子供を海外に送るべき

昆 今後、協会はどんな方向に展開していくのでしょうか。

伊藤 これまで事業に補助をしてきた農水省という後盾が、この先、はずれようとしています。そのため、どういう人を対象にして研修を組み立てていくのか、新しい枠組みを考える過渡期になりつつある。今までは「日本農業の発展のために先進的技術を学ぶ」が枕言葉のように使われていて、そこから脱却できてないといえはその通り。ただしASEA



現在、研修生を派遣している国は5カ国で、米国、デンマーク、ドイツ、スイス、オランダ。農業後継者が農業大学校に2年間行って、その後海外研修するパターンは減っている。反対に非農家や女性の割合が増えている。かつてのように「血のにじむような苦勞をする」と説明すると参加者が減るので楽しいイメージを前面に出しているが「騙してでも行かせれば必ずプラスになる」と伊藤氏。

写真提供：
(社)国際農業者交流協会

Nの研修生を受け入れていく中で、受け入れ側である日本の農家も学ぶことがあり、だからこそこの事業をやっているんだという自負もあります。いろんな国の人と交流しながら自分たちの立ち位置を理解するのが私たちの使命だと思っんです。

昆 これまでやってきたことの教育ノウハウはあるでしょうし、教育としての社会投資は必要ですよ。実際、幅広くいろんな人が育っているわけですし。それにやっぱり自分自身が海外に行けば行くほど、研修の価値を感じるんです。日本にいるだけではわからないことが多いなど。

伊藤 今、補助金が減らされる中で、「本当に価値があればお金を出していく」と言われます。だからどうやってこの研修の価値をどうアピールするかを考えないといけません。

昆 最近は大して役に立たないような専門学校が儲かっているでしょう。それに比べたら、この内容で1000万円は安いですよ。行かせない農家の親はバカけてると思う。

伊藤 農業大学校だといろんな補助がつくから、高いと感じるんですけどね。初期投資として後のリターンを考えると安いと思うんですが。

昆 先日オーストラリアに若い世代と行ったら、州政府の人がアテンドしてくれるので、「俺たちは求めら

れている」と感じて、彼らに勇氣と自信が湧いてくるのが分かるんですよ。人はチャンス与えられると、1週間でも変わる。最初の金を出すのが親の役割であり、移民に行くんじゃないで第2農場を海外に持つための一歩だよ、と強く言いたい。

伊藤 企業のトップやいい経営者の息子であるほど、帝王学を学ぶ場として放り込んでもらえればいいなと思います。最近の若者はやる気がないと非難されることもあります。どうしたらいいのかわからないだけで、別に腐っているわけじゃない。

昆 まさにそうです。人生を迷っている人にも、この体験は自分を見つける鏡になるでしょうね。

伊藤 ただ昔のように「血のにじむような苦勞をする」と説明すると参加者が減るので、できるだけ楽しそうなことを前面に押し出しているんですよ（笑）。言い方は悪いですが、騙してでも行かせれば必ずプラスになる自信はあるので。

昆 今後、交流協会の役割は日本農業の研修の中でも中核的な存在になつていくのではと感じました。こうした研修によって実務者や経営者としての役割を果たせる人が、国境を越えて日本農業の可能性を広げていくに違いありません。本日はありがとうございました。